

# 数研 AGORA

▶大河ドラマと歴史教育

／陶山 浩……1

▶プラトンをどう教えるか

／兼松 正人……3

▶世界と日本のおもなできごと

(2011.9～2012.9)

／数研出版編集部……6

No.58

この用紙は、再生紙を使用しています。

## 大河ドラマと歴史教育

兵庫県立いなみ野特別支援学校教頭  
陶山 浩

### 1 はじめに

今年の大河ドラマは「平清盛」で、放送当初から話題にのぼる場面があり、また兵庫県にも関連する歴史遺産があって、私には関心が高かった。その大河ドラマも、1963年の「花の生涯」(主人公：井伊直弼)から始まって、今年「平清盛」で51作品目を数える。

大河ドラマは、大なり小なり歴史教育にも影響を与えていると思われる。自分自身を振り返ってみても、歴史を好きになったきっかけは大河ドラマであった。いまだに、毎週日曜日の午後8時に視聴することが習慣となっている。では、なぜ大河ドラマに惹かれるのか。その理由の一つは、ある歴史上の人物から時代を読み解くという大河ドラマの構成が、歴史を考える一つの方法論としても存在しているためではないだろうか。

小学校6年生の歴史学習が「人物・文化遺産中心の歴史学習」となったのは、1968(昭和43)年版の学習指導要領からである。2008(平成20)年版の学習指導要領では、授業で取り上げる人物として、卑弥呼から野口英世まで計42名が例示されており、いずれもそれぞれの時代を代表する人物である。この人物の働きを通じた歴史学習のねらいは、人物そのものの理解ではなく、その人物の生きた時代背景の把握にある。私たちは、小学校の段階で歴史を考える方法論を学んでいるのである。

### 2 視聴率からの考察

「平清盛」の視聴率が低迷している。第37話までの平均視聴率は12.7%で、8月には7.8%、9.3%と2度の10%割れを記録した。過去50作品の最低平均視

聴率は「花の乱」(1994年、主人公：日野富子)で14.1%である。次に、「竜馬がゆく」(1968年)の14.5%、「武蔵 MUSASHI」(2003年)の16.7%と続く。

では、なぜ「平清盛」の視聴率が低迷しているのだろうか。その理由には、放送当初から「画面が見にくい」との批判があったことや、宮中行事を細かく監修する「儀式・儀礼考証」が大河ドラマでは初めて導入されたことなどがあげられるだろう。普段馴染みのない天皇家や藤原摂関家が丁寧に描かれ、その分、青年平清盛の存在感がかすんでしまったのである。また、鳥羽法皇、平忠盛、藤原通憲(信西)、藤原頼長、源為義など一般にはあまり馴染みのない人物が、ドラマの中で重要な役割を果たしているということも関係しているかもしれない。平安時代を描いた作品は、「平清盛」を含めて6作品ある。「源義経」(1966年、平均視聴率23.5%)、「新・平家物語」(1972年、21.4%)、「風と雲と虹と」(1976年、24.0%)、「炎立つ」(1993年、17.7%)、「義経」(2005年、19.5%)で、この5作品の平均視聴率は21.2%である。過去50作品の平均視聴率23.3%と比較すると、平安時代を描いた作品は少し人気がないのかもしれない。

ただ、今回の結果は「平清盛」だけに収斂されるものなのだろうか。大河ドラマの平均視聴率の推移を見てみると、1983年から1992年までの10作品では28.5%、1993年から2001年は20.8%、2002年から2011年は19.7%と大河ドラマ自体の視聴率も低くなってきている。その間に、民放でも時代劇や時代物と称される番組が姿を消していった。このような傾向を打破するため、NHKはその時々的人气者(2004年「新選組!」香取慎吾：17.4%、2005年「義経」滝沢秀明：19.5%、2010年「龍馬伝」福山雅治：

18.7%など)をキャスティングしたり、人気脚本家(ジェームス三木「独眼竜政宗」「八代将軍吉宗」「葵徳川三代」、三谷幸喜「新選組!」、内館牧子「毛利元就」、橋田壽賀子「おんな太閤記」「いのち」「春日局」など)に作品を依頼したり、女性に視点をあてた作品(2006年「功名が辻」20.9%、2008年「篤姫」24.5%、2011年「江～姫たちの戦国～」17.7%)を描いたりして、視聴率アップに努めてきた。ちなみに、過去に高視聴率を記録した作品には、「赤穂浪士」(1964年、31.9%)、「太閤記」(1965年、31.2%)、「おんな太閤記」(1981年、31.8%)、「徳川家康」(1983年、31.2%)、「独眼竜政宗」(1987年、39.7%)、「武田信玄」(1988年、39.2%)、「春日局」(1989年、32.4%)、「秀吉」(1996年、30.5%)などがある。舞台となる時代は、いわゆる戦国時代に集中しており、判官最良、下克上のサクセス・ストーリーが好まれていることがわかる。

### 3 大河ドラマと歴史教科書

高校の日本史Bの授業において、平清盛が描かれている古代から中世(院政から平氏政権・源氏政権)に配当できる時間数は、せいぜい6～10時間ほどであろう。その中でも特にストーリー性が顕著な人物として、「源義経」「源頼朝」「平清盛」「後白河法皇」などがあげられるが、授業では、「保元・平治の乱」「平氏政権の特色」「院政期の文化」「源平の争乱」「鎌倉幕府」と内容が盛りだくさんで、ストーリー性を強調したものにはならないことが多い。

ところで、教科書では、平清盛はどのように描かれているのだろうか。その概要は、「平氏政権の特徴は、武士政権でありながら貴族的性格も色濃く持ち合わせていた。武士政権として、清盛は各地の武士団の組織化を行い、西日本を中心に勢力を確立した。そして、貴族的性格としては、院近臣の立場を利用して、娘の徳子を高倉天皇の中宮とし、その子安徳天皇を即位させて外戚となるという、摂関家に近似した体制を確立した。」といったものである。

これには、『平家物語』の悪人論に依拠しているところも少なからずあると思われる。『平家物語』は、一巻から五巻までが清盛、六巻から八巻までが義仲、九巻から十二巻までが義経という構成になっている。冒頭の「祇園精舎」の章では、「…此等(平将門、藤原純友、源義親、藤原信頼)は奢れる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まちかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝うけ給るこそ、心も詞も及ばねぬ。」と、古今の反逆者とともに清盛の名があげられてい

る。国家への反逆が明らかな将門や純友、藤原信頼らと同列に扱われていることは何を意味するのだろうか。

清盛は、次の3つの側面から描かれることが多い。①武士としての清盛、②貴族としての清盛、③出家後の清盛である。その中でも、『平家物語』によって形づくられた「平相国入道清盛」と称される専制者としてのイメージが長く一般に流布してきた。『平家物語』は、清盛の悪行として、①殿下乗合、②後白河法皇の鳥羽殿幽閉、③都遷し、④南都焼き討ちの4つをあげている。これらの悪行はすべて出家後に行われている。

しかし、最近の研究成果に基づき、平清盛の評価は武士の世の中を切り開いた先駆者として見直されつつある。東アジアにつながる国際都市福原建設という壮大な夢の構想もその一つといえる。ただし、大河ドラマは、時代考証こそ行っているが脚色された部分も多くあることを、教える側が意識した上で授業に活用することが肝要である。

これに関連して、兵庫県教育委員会では、前々年度から「平清盛と源平合戦関連文化財群」の調査を実施している。県内に所在する「平清盛」や「源平合戦」に関連する文化財・歴史的資源について、兵庫県内の市町教育委員会から情報を収集し、①史実系関連文化財群、②伝承系関連文化財群に区分して、その調査結果を兵庫県教育委員会事務局文化財課のホームページで公開している。また、それをもとに、①地域を愛する人づくりへの活用、②魅力あふれる地域づくりへの活用を提案しており、これらは歴史の授業づくりにも大いに参考になるものである。

### 4 おわりに

歴史を学ぶことは、自らの座標を確認することにもつながるといわれる。歴史を学ぶことが、生きることへの新たな視点を獲得する手がかりになるかもしれない。その点では、大河ドラマを現在の自分自身の生きざまを省みる機会ととらえることもできるのではなからうか。

#### 【参考】

- ・小谷野 敦『大河ドラマ入門』光文社新書、2010.1.
- ・特別展「清盛と日宋貿易」兵庫県立考古博物館